

平成三十年年度

上宮学園中学校入学考査問題（一次A）

国語

（注意）

- （1）この問題用紙は、「開始」の放送があるまで開いてはいけません。
- （2）問題は「一」から「三」まであります。試験時間は五十分です。
- （3）解答用紙は別に一枚あります。
- （4）解答用紙には、必ず受験番号・名前を記入しなさい。
- （5）「終了」の放送で、筆記用具を置きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

深呼吸をすると、真っ白な息が視界を被った。その向こうに注のぼりが見える。中継所の前後百メートルはのぼりの設置が禁止されているけれど、そこから外れた場所にえんじ色、紺色、藤色、ピンク色、赤、青、黄色、緑……色とりどりののぼりがある。たくさんの大学の名前が書かれたのぼりは、風になびいてばさばさと揺れる。観客の振る小旗の音に声援がマぎって、まるで大きな生き物の息づかいのようだった。

「眞家、頼んだぞ。」

春馬が被っていた注ウインドブレーカーを預かった付き添い役の緒方先輩がもう一度、先程よりも強く肩を叩いてきた。四年生の彼は二、三年と箱根駅伝を走ったけれど、最後の箱根となる今年は出走者に選ばれなかった。

「わかってますよ。」

そう短く答えて、春馬はA立ち上がった。その場で軽く足踏みとジャンプを繰り返す。体を撫でる空気がより一層冷たくなった気がした。

まるで駅伝のたすきリレーをするために作られたかのような側道では、揃いの防寒着を身につけたスタッフが無人の中継地点から、国道十号線を睨みつける。その視線の先は東京だ。大手町をスタートし、一本のたすきを運ぶ男達がこの場所へやってくるのを、今か今かと待ち構えている。

スタッフの一人が、春馬の所属する大学の名前を呼んだ。藤澤大学、という寒さをものともしない大声に釣られるように、春馬は大きく返事をした。小走りで側道に出ると、観客の誰かに名前を呼ばれた。

眞家、頑張れ、眞家。

藤澤、藤澤。

勝て、藤澤。

コースの先に、一区のランナーの姿が見えた。本道から逸れて側道へ入り、その姿が大きくなっていくごとに、声援は歓声になる。誰かの名前でも応援の言葉でもなくなり、「わー」とか「おー」といった熱っぽい雄叫びになる。男も女も関係なく、子供も大人も年寄りも関係なく、熱狂する。

ああ、そうだ。これが箱根駅伝だ。今年で三度目の経験なのに、改めて春馬はそう思った。たかだか大学生の駅伝なのに、関東学生陸上競技連盟に加盟している大学しか出場しない。ローカル大会なのに。でも、そんな理屈など関係なく、正月のただ中にある人々をムチュウにさせる。新年を迎えた喜びや清々しさが、小旗にのせられ空高く舞い上がる。

藤澤大学の一区のランナーに遅れること十メートル、二人のランナーが走ってくる。運営スタッフが追加で違う大学の名前を呼んだ。日本農業大学、英和学院大学。ほぼ同時に二人の男が返事をして、駆け足で側道に出てきた。

鮮やかなえんじ色のユニフォームをまとった英和学院大学の助川亮介と、純白と深緑色のユニフォームを着た日本農業大学の藤宮藤一郎。七色の光の線が走るスポーツ用のサングラスをかけた助川の表情はほとんど読み取れない。サングラスをかけていなかったところで、彼はあまり感情を顔に出してくれない人間だから意味がなさそう。一方の藤宮はどこか硬い表情をしていた。唇を真一文字に結び、春馬の顔も助川の顔もみることなくゆっくり中継ラインの上に入った。

「お久しぶりっす、助川先輩」

試しに、助川に声をかけてみた。藤宮を挟む形で並んだ助川は、Bこちらを見たけれど特に何も答えなかった。

構わず、春馬は続けた。

「あ、それは藤宮さんも一緒ですからね」

隣に立つ藤宮の顔を覗き込んでそう言うと、Xと助川が遅いリアクションを見せた。

「俺もだな」

藤宮もうなずいて肩をすくめる。「そんなことしてしろ、走り終えた瞬間、お前の兄貴にぶっ飛ばされるぞ」と。

④そこからは、誰も口を利かなかった。

第九十二回東京箱根間往復大学駅伝競走。一月二日の往路は、青空のもとスタートした。

それからおよそ一時間、一区ももうすぐ終わろうとしている。

(中略)

今日は、日中の気温が三月中旬並になるというヨホウだった。暑いレースになりそうだ。強風ではないものの、向かい風の中でレースが続くだろう。空気も乾燥している。スタート前に水分補給はしっかりしたが、途中の給水も重要なポイントになる。

ひとまずは後ろの二人に注意を払いつつ、できる限りの差を作って三区の走者へたすきをつなぎたい。けれど、それだけでは駄目だ。三区、四区、五区。そして明日の復路。レースの流れを俺がここで作る。藤澤大学の総合優勝を、俺が引き寄せる。エース区間である花の二区を任された意味は、よく理解しているつもりだ。

分離帯の上に設置されたやぐらには、日本テレビのカメラマンが中継用の大きなカメラを構えていた。藤澤大学と、その後ろに続く二つの大学のたすきリレーを **C** 映していた。その横を通過し、たすきリレーをする選手をかたどった箱根駅伝記念像に見送られ、側道を出る。自分の前を走る選手はいない。誰も、いない。

けれどいつも必ず、春馬は自分の目の前にとある人の姿を思い浮かべる。

自分がどんなに速く走ろうと、誰よりも前を走ろうと、そこにはいつも彼がいた。彼が走っていた。

彼は、風のように駆けていく。

獣のようにまっしぐらに。

弾丸のように力強く。

颯爽と自分の前を走るその背中を見つめながら、自分が持っている言葉はなんと **注** ちんけだろと春馬は思った。彼の走る姿の、強さとか

美しさとか、そういったものを何一つ言い表すことができない。

彼は走る。風を切るといふより、風に乗るようにして。体を風に溶け込ませるように、軽やかに飛ぶように。その姿は、他の誰とも違った。彼の肩が前後するごとに、足が前に繰り出されるごとに、呼吸するたびに、その体に弾かれた空気が光の粒になって飛び散る。

その欠片が、自分のもとへ飛んでくる。鼻先をかすめて、春馬をツツんで消えていく。

彼は——自分の実の兄である眞家早馬は、そんなに格好いい奴ではない。お人好し。マイペース。女子だろうと年下だろうとあまり強く出られない。優柔不断。頼まれたら断れなくて、しょっちゅう損をする。注 リーダーシップ、なし。

たかだか自分より一年早く生まれただけで兄をやっているけれど、本当にそれだけだ。⑤ 日常生活の中で、兄として尊敬できるような面はなかなか見ることができない。口喧嘩をしたら確実に春馬が勝つ。殴り合いをしたって、思い切りのよさは自分の方が勝っているだろう。

そう思うのに、兄の走る姿を思い浮かべると、そんなふうを考える自分が実につまらない人間におもえてしまう。

物心ついた頃からそう、兄の走る姿は、何者にも負けない格好よさを持っていた。お人好しで優柔不断で器用貧乏な、こちらが見ていていらいらしてしまうようなそんな兄の短所も、すべては走ることの対価として与えられているように思えた。走っているときの兄は、最強だった。強く気高く美しく、誰よりも速く、すべての人の前を走る。彼の視界には何人もおらず、そこにはただ兄だけの世界が広がっている。どれほど気持ちがよくて、どれほど綺麗な景色なのだろう。

どうかその世界を、俺にも見せてくれないか。

そう思った瞬間、兄は振り返る。⑥ こちらの心を読んだかのように、首をわずかに傾けて春馬を見る。

そして何も言わず、笑ってみせる。白い歯を覗かせ、目を細め、嬉しそうに顔を **D** させる。

お前もここまで来てみる。もの凄く気持ちよくて、楽しくて、気分がいいぞ。

まあ、俺がいる限り無理だろうけど。

兄らしくない、小生意気な言葉が聞こえた気がした。

耳を澄すました。後続の足音や息いきづかいは聞こえない。足を繰り出すたび、腕うでを振るたび、兄の背中が近くなる。兄の呼吸する音が近くなる。自分の息を吸う音、吐く音が、兄のものと重なる。

手を伸ばせば触れるんじゃないか、そう思ったとき、兄は再びこちらを振り返った。けれど驚おどろいているわけでもなく、また前を向く。

⑦ 次の瞬間、兄は春馬のずっと前にいた。

一步、二歩、三歩とあっという間に距離を取られ、置いていかれた。いとも簡単に、余裕たっぷりに。

自分の体が、髪の毛や爪の一枚一枚、細胞の一つに至るまでが、喜びに震えるのがわかる。ああ、楽しい楽しい楽しい！ 走って、なんて楽しいんだ！ そんな単純な喜びに体が弾む。

さあ、追いついてやるよ。並んでやる。そして追い抜いてやる。

眞家早馬。早馬の名前を持つ兄の背中を睨みつけ、春馬は走った。

輝かがやきをまとうその背中が自分の中にある限り、苦しみも疲れも痛みも、何もかも消えてくれるような気がした。

(額賀 漣『タスキメシ』による)

注 のぼり……のぼり旗。たけが長く幅のせまい布をさおにつけて立て、標識とするもの。

ウインドブレーカー……防寒や風よけのために着用するスポーツ用のジャンパー。

箱根駅伝……年に一度開かれる大学生のリレー競走。それぞれの大学から選ばれた各十人の走者が東京と箱根を二日間にわたって往復する。大学は四年で卒業するため、四年生は最後の出場機会となる。

ローカル……ある地方に限定して行われていること。

リアクション……相手の発言や行動などに対する反応。

ちんけ……ちっぽけで、ひどく劣っている様子。

リーダーシップ……人を引っ張っていくような性質や才能。

器用貧乏……器用なためにあれこれと気が多く、また、都合よく使われてその人自身は大成しないこと。

問1 — 線部あくえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問2 — 線部①「まるで大きな生き物の息づかいのようだった」とありますが、ここに使われている表現技法としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 倒置法 とうち イ 反復法 ウ 比喩法 ひゆ エ 体言止め

問3 — 線部②「強く肩を叩いてきた」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 春馬が緊張でガチガチになっているため、上級生としてなんとかリラックスさせようと思ったから。

イ 春馬が四年生である自分を押しつけて出走者に選ばれたことがどうしても許せないと思ったから。

ウ 自分が出走できないことは残念だが、春馬にはチームのために頑張ってもらいたいと思ったから。

エ 自分が最後の箱根を走れなくなってしまった以上、チームの結果はどうでもいいと思ったから。

問4 —

A

D

 に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ア しっかりと イ ちらりと ウ はらはらと エ ゆっくりと

オ くしゃっと カ こっそりと

問5 — 線部③「無人」と同じように、「無」をつけて熟語になる漢字を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 決 イ 完 ウ 念 エ 来

問6 —

X

 に入る助川のせりふとしてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア お前に花なんてにあわねえよ

イ お前に負けるわけがあるかよ

ウ どうせお前には勝てねえよ

エ お前からの花なんているかよ

問7 ———線部④「そこからは、誰も口を利かなかった」とありますが、その時の心の状態を説明した次の文の ・ に入る言葉の組み合わせとしてふさわしいものを、後の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

もうすぐ始まるレース本番に向けて、しだいに 感が増してきて、 力を高めようとしている。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|-----------------------|---|----|---|---|----|---|----|---|---|------------------------|---|----|---|---|----|---|----|
| ア | 1 | 疲労 <small>ひろう</small> | 2 | 精神 | イ | 1 | 疲労 | 2 | 集中 | ウ | 1 | 緊張 | 2 | 競争 | エ | 1 | 緊張 | 2 | 集中 |
| オ | 1 | 不安 | 2 | 競争 | カ | 1 | 不安 | 2 | 影響 | キ | 1 | 高揚 <small>こうよう</small> | 2 | 影響 | ク | 1 | 高揚 | 2 | 精神 |

問8 ———線部 a 「まっしぐらに」・ b 「物心ついた」の文中での意味としてふさわしいものを、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

a 「まっしぐらに」

- | | |
|---|----------------|
| ア | 常にびくびくしているように |
| イ | まっすぐ目標につき進むように |
| ウ | とてもすばやく行動するように |
| エ | 目的地を決めずうろつくように |

b 「物心ついた」

- | | |
|---|--|
| ア | 世の中の物事が何となくわかるようになった |
| イ | 自分なりの意見や主張を多く持つようになった |
| ウ | 一般常識に対してよく疑問を抱く <small>いだ</small> ようになった |
| エ | 良いことと悪いことの区別がつくようになった |

問9 ———線部⑤「日常生活の中で、兄として尊敬できるような面はなかなか見ることができない」とありますが、春馬は兄の持つ数々の欠点をどのようなものとしてとらえていますか。文中から七字でぬき出して答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

問10 — 線部⑥「こちらの心」とありますが、その内容としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 他に何のとりえもないのに走る能力だけは自分より高い兄がうらやましいという気持ち。

イ 兄が走りながら一人で見ているはずの気持ちのよい景色を一度見てみたいという気持ち。

ウ 兄に負け続けるのはいやなので、どんな手を使っても兄に追いつきたいという気持ち。

エ 走ることも兄に勝って、自分の方が人間的に上であることを証明したいという気持ち。

問11 — 線部⑦「次の瞬間、兄は春馬のずっと前にいた」とありますが、想像の中で兄に置いていかれた春馬の気持ちを説明した次の文の

1

3

1

2

3

出して、それぞれ答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

1

2

3

を持つ兄の姿を見て走るのは 2 と感じ、いつか兄を 3 と意気込んでいる。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ヒガンバナは、古くに、中国から日本に渡来とらいしました。この植物は、秋にツボミが地上に出て真っ赤な花を咲かせます。花は、あざやかな赤い色で、目にまぶしく目立ちます。しかし、ふと気がつくとき、この植物の葉っぱのインシヨウは、ほとんどありません。「ヒガンバナの葉っぱは、どこにあるのか」と不思議に思います。

「春から夏に葉っぱが茂り、秋に葉っぱが枯れたあと、花が咲いたのか」と思い、花の下を探してみても、枯れたばかりの葉っぱは見当たりません。「花の下に生えているのか」と思い、花が咲いている季節に探しても、葉っぱは生えていません。

実は、この植物は、秋に花が咲いたあとに、細く目立たない葉っぱを生やすのです。秋の終わりから冬になると、少しアツミのある、細く長い葉っぱが多く茂りはじめます。注何の変哲へんてつもない葉っぱであり、これがヒガンバナの葉っぱだと気づくまでは、目立ちません。ただ、一度気づけば、注意していると、けっこうあちこちの畑のあぜや空き地に生えているのがわかります。特に、冬には、他の植物の葉っぱが少なくなるので目立ちはじめます。

A、この植物の花と葉っぱが会うことはありません。ヒガンバナの呼び名には、「マンジュシャゲ」や「カジバナ」、「シビトバナ」いろいろありますが、その中の一つに「ハミズハナミズ」というのがあります。何のことかと思われるでしょう。これは、「葉は花を見ず、花は葉を見ず」を省略して呼び名となっているものです。

ヒガンバナでは、花の咲くときには葉が見られず、葉が茂っているときには花が咲かないので、葉っぱと花が会うことがないということを意味しています。「出会うことがないので、お互いが思い合い、花は葉っぱを思い、葉っぱは花を思う」という意味から、相思相愛を連想してでしょうか、「相思華」とよばれることもあります。

昔、ヒガンバナは、お墓のまわりに、わざわざ植えられていました。亡くなった人のからだからだが土葬どそうされていた時代、そのからだをモグラやネズミが食べに来ないように、植えられていたのです。なぜなら、この植物は「リコリン」という有毒物質をもっているからです。そのため、この植物がお墓のまわりに生えていても、不思議ではないのです。ところが、その事情を知らない人には、「墓地③に咲く花」とされ、気味悪

がられて、大切にされてきませんでした。

B、この植物は絶えることなく生き続けてきました。しかも、細々と生きているわけではありません。ヒガンバナの花が咲く地面を掘れば、花の個数の何倍も何十倍ものキュウコンがゴロゴロと埋まっています。冬の太陽の光を受けて育つ葉っぱが栄養分をつくって蓄えて、次の世代を繁殖させているのです。

この植物の葉っぱは、冬に育つので生育場所を他の植物とうばい合う必要はありません。**C**、冬の太陽光は弱くても、多くの葉っぱで毎日その日差しを受ければ、他の植物に邪魔されずに光合成をして繁栄できます。もちろん、冬の寒さの中で緑の葉っぱが育つしくみは必要です。でも、そのしくみを身につけさえすれば、その個性を生かして、他の植物と横並びの競争をせずに、繁栄できるのです。

秋の野に、この植物は、葉をつけずに真っ赤な花を誇らしげに広げます。その姿は、「人間の世界では、多くのザッソウのように個人や組織が競争にあくせくして心の余裕をなくしています。個性を生かして横並びの競争を避ける努力を怠っていませんか」と語りかけているように感じるときがあります。

この植物の生き方を考えると、「きびしい世界の中でも、工夫をすれば、競争を避けて繁栄の道を探れる可能性もあるのだ」と、励まされ勇気づけられます。**Y** ことの大切さを教えられるようです。

(田中 修『植物のあっぱれな生き方』による。)

注 何の変哲もない……特に変わったところがなく平ぼんである様子。

あぜ……田と田の間にある、土を盛り上げてしきりにした部分。

問8 本文の内容を説明した文としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア ヒガンバナは、花のあざやかな赤色によって人間を遠ざけ、簡単にはつみ取られないように進化してきた。

イ ヒガンバナは、他の植物のすきまに葉を広げることによって、生育場所をうばい合うことなく共存してきた。

ウ ヒガンバナは、他の植物と異なる時期に葉をつけることによって、生育場所をめぐる競争を上手に避けてきた。

エ ヒガンバナは、強力な個性を生かすことによって、他の植物との競争に勝ち、きびしい世界を生きぬいてきた。

二 次の1〜10の（ ）に入る言葉をひらがなで入れて、下の意味に合うように慣用句やことわざを完成させなさい。

- 1 () にかける……得意げに自まんすること。
- 2 枯れ木も山の（ ）……つまらないものでもないよりはましだということ。
- 3 () も木から落ちる……名人でも失敗することがあること。
- 4 () をさす……後で問題が起こらないように念をおすこと。
- 5 立て板に（ ）……つまることなくすらすらと話すこと。
- 6 まかぬ（ ）は生えぬ……努力せずによい結果を期待してはいけないということ。
- 7 () は熱いうちに打て……物事は思い立ったらすぐに始めるのがよいということ。
- 8 絵にかいた（ ）……内容はりっぱだが実現する見こみがないこと。
- 9 () がかたい……秘密をなかなかしゃべらないこと。
- 10 急がば（ ）……近道を行くよりも、安全で確実な方法をとる方がよいということ。